

---

# 死番屋始末伝

鳥越丈二郎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

死番屋始末伝

### 【Nコード】

N2456BA

### 【作者名】

鳥越丈二郎

### 【あらすじ】

はじまりは二十年前、父の時代に謀略によって流された血があった。

その血の結末は刻を経た今も終止符が打たれることなく、いつしか次の時代へと密かに渡された。

武家の次男坊、村山寅之助と悲劇の血を受け継いだ神谷の悪竜。ある日を境に、ふたりはその血の運命に巻き込まれていく。

## 1・虎と竜

始末伝 1・1

東北の最南端に位置する、小さなその国の名は奥州水石藩。

その国境の山中には、真夜中の月明かりだけを頼りにして走る、若者ふたりの姿があつた。

「どうした寅之助、もたもたしてると役人供に追いつかれちまうぞ」  
前をいく青年は、そう言つて楽しげに疾駆する。

まげを結わない歌舞伎の連獅子のような白い長髪。  
左眼には古い刃物傷が残る隻眼の若者。

通称『神谷の悪竜』。

そして彼の後ろを走るのは、まだその顔に若干の幼さを残す少年。  
名を村山寅之助といった。

「竜、あいつらの的はあんただ！さつさと山を越えてくれ」  
遠くから松明の明かりと、数人の男の声が聞こえてくる。  
「どうやら彼への追っ手らしい。」

「あんたは俺にとって兄であり親友だった。これが今生の別れだなんて思わねえ」

袴姿に太刀一本を腰に挿した武家の次男坊村山寅之助は、竜に背を向けて迫る追っ手を前に、ゆっくりとその太刀を抜いた。

「竜……、必ず生きて、また会おう」

「ああ……寅之助、てめえも死ぬな。また会う事は絶対の約束だからな」

「がつてんだぜ……！」

それが別れ際に交わした、ふたりの会話だった。

その後、『神谷の悪竜』は水石藩から完全に姿を消し、以降ふたりが再会を果たすのは、十余年後の事になる。

この時、『神谷の悪竜』は十九歳。  
同じく『放蕩の悪虎』と呼ばれた村山寅之助は十六歳。

若いふたりは、この日を境に、その人生を大きく変える事になる。

だがまずは、この火種が起こった前日まで、時を遡<sup>さかのぼ</sup>りたい。

十二月十九日。

その日の寅之助は、放蕩<sup>ほうとう</sup>の悪虎という呼び名どおり、長屋町のゴロツキ達と路上に座り込んで、チンチロリンやオイチョカブなどの博打遊びに興じていた。

この長屋町は、通称を神谷町という。

町民のほとんどは百姓以下という身分で、藩の人別帳に名前すらない。

他藩で盗みや殺し、火付けなどの罪を犯し、行き場をなくした流れのおたずね者が、終の住処として集まったのがこの集落だった。

いわば世の中のはじかれ者だけが暮らす町である。

村山寅之助はいつもこんな場所に出入りしていた。

だが彼のその身分は水石藩町方定廻り衆、与力の家柄に生まれた、れっきとした武家の息子である。

父親はその与力という身分として乗馬も許されているし、殿様にもじかに謁見できる上級武士であった。

その息子となれば次男坊であつても、このような場所に頻繁<sup>ひんぱん</sup>に出入りすることは許されない。

しかし寅之助という男は、そんな事を齒牙にもかけなかった。

むしろこの若者は、神谷町の方が、よっぽど自分の性に合っている  
と思い、家柄だとか、よそ様の目だとか、そんなことを気にしない。  
道端に莫<sup>もく</sup>座を敷き、お天道様の下で昼間から酒を呑み、花札やチン  
チロリンをする事は、彼にとってこの上ない娯楽である。

武家の放蕩息子と言ってしまえばそれまでになるが、寅之助は何よ  
りもこの神谷町に住む人間が好きだった。

ここには金持ちや上下の身分もないし、やれ礼儀だ、しきたりだ、  
学問だと、せせこましいわずらわしさが無い。

ただ、みんなが横一線の貧乏で、ただ横一線に太陽の下に生きてい  
る。

そして困った時は当たり前のようにみんなで助け合うから、誰しも  
生活に苦痛を感じていない。

ここには人間の生活の原点があるんだ。

寅之助は常々そう感じていて、彼らの生活をうらやましく思ってい  
る。

そういう人と人の遠慮のない繋がりが好きだった。

毎日むずかしい顔をして、威張りながら町を歩く武士よりも、よほ

ど人間らしく感じるのだった。

だから幼い頃から、家人の目を盗んでは家を出て、いつもこの町に出入りしていた。

今や寅之助と、この長屋の住人たちとは、実の家族と変わらない間柄になっている。

だが、件の事件<sup>くだん</sup>につながる火種は、この何気ない穏やかな日に起った。

神谷町の集落入り口辺りがやけに慌ただしかった。

見ると数人の武士が姿を現し、何やら口上文を読み上げている。

「神谷町住人は聞くべし！

来たる十二月末日までに、この町の住人は長屋を退去すべし。人別帳に記載ある者は藩内の他村へ移住を許可する。

又、人別帳で身分改めの出来ぬ者は只今より、この場にて詮議し、心身怪しき者は投獄とする！」

現れた武士は水石藩の役人の様である。

口上書の内容は唐突で実に一方的であり、神谷町は一気に騒然となった。

「何だよあいつら……！無茶苦茶な事を言ってやがる。この長屋の奴らなんて、実際どいつもこいつも人別帳に名前なんざ、ありやしねえってのに……」。

まさかあらかた投獄する気じゃねえだろうな、ふざけんなよバカ野郎！」

寅之助の博打仲間の茂吉が、腕をまくり上げて憤慨している。その言葉をきっかけに、神谷町のあちこちから、不満の声が上がった。

この町の人間は、元悪人ぞろいだけに気が短い者が多い。だが悪から足を洗って以来は住民同士結束の硬さが売りで、人情家も多い。

誰かれ構わず牢獄行きにしようものなら、こうなるのが当然の成り行きだった。

そんな光景を、道端に敷いた莫蔭で寝転がる寅之助は、嬉々として笑って見ていた。

「いいねえ、役人相手に一步も退かねえたあ……。やっぱり神谷町はこうでなきゃイケねえ。さあて、兄者はどうでるかなあ」

寅之助が言う兄者とは、押しかけて来た役人衆の中心で口上書を読み上げた武士、村山鷹利が彼の実兄だった。

そんな鷹利はひたいに青スジを立て、騒ぐ住民をキッとにらむ。

「黙らんか！叩つ斬るぞ貴様ら！」

キンキンと響く声で村山鷹利は怒なり声をあげる。



そのキンキン声に寅之助は、ひどい嫌悪感を抱いた。

ちっ……、なんだあの言い草は。

寅之助は幼い頃から兄鷹利と犬猿の仲であった。

気に入らない点を挙げたらキリが無いのだが、寅之助は特に兄の甲高い怒鳴り声が嫌いである。

思うようにならなければ怒鳴る。それで相手がおとなしくならないなら、力尽くで黙らせようとする。

向かいあう人間のことなど考えもしない。

道行く場所で自分以下をすべて平伏させようとする、その兄の傲慢さが寅之助は気にいらぬ。

甲高い声はその身勝手さの象徴のように感じるのだった。

そんな鷹利の怒声に住民たちも一瞬は静まり返ったが、またすぐに群れの中から「斬れるもんなら斬ってみやがれ」と罵声が飛び返った。

元々が失う物の無い人間の集まりである。  
血気の盛りでは彼らが一枚上であった。

……が、盛ん過ぎるには相手が悪かった。

「ああ？今、斬ってみろって聞こえたな……」

鷹利の顔に陰が射している。

眼が妖しく真つ赤に血走っていた。

いけねえ……！

寅之助は跳び起き、鷹利目掛けて猛然と走った。

だが、すでに遅かった。

鷹利は迷いすら微塵もなく、抜き撃ちに一番近い住人を胴切りにした。

その鮮血が勢い良く噴き出し、返り血となって鷹利をあっという間に朱く染めた。

まさかの光景に、群集は悲鳴と共に四散した。

「何やってんだ、ゴラア……！」

寅之助は鷹利の刀の柄と顔面を鷲掴みにして、そのまま押し倒した。

「本気で斬ってんじゃねえよ、この野郎！」

寅之助は急いで斬られた住人を抱え上げたが、着物の間から内臓が飛び出していて、思わず顔を背けずにいられなかった。

言葉にならないかすれ声が、荒い呼吸と共にもれてくる。  
だが、もう何を言っているのか聞き取れない。

「くそっ……、死ぬなっ！こんなくだらねえ事で死ぬなっ……！」

寅之助は斬られた住人に何度も呼びかける。  
住人は致命傷だが、まだ微かに息がある。

しかし息があっても、なす術はなかった。ただ吐血と流血に苦しみ、  
涙を流すばかりである。

「寅之助か……。この愚弟め……。十手仕事の邪魔をするんじゃない！」

背後から兄、鷹利が抜刀のまま立ち上がっていた。

「どけ愚弟、貴様ごと叩き斬るぞ」

「やれるもんならやってみろ！クソ野郎！」

寅之助が怒りに任せて立ち上がるうとした瞬間、目の前に立つ鷹利は、背後から何者かに着物の襟首を捕まれ、再び倒された。

現れたのは、藍色の着流しを着た白髪の長い髪の男。

寅之助の眼前には、竜の姿があった。

彼は何も聞かず、寅之助の腕に抱えられた住人を見ると、静かに「……許せ」とだけ言い、そのまま斬られた男の首をあらぬ方向へひねった。

にぶく骨の鳴る音と共に住人が絶命したのを見届けると、竜は目を閉じて合掌した。

「……おい役人供。一体何の訳があって俺の仲間を斬りやがった」

竜の声が怒りに震えていた。

そのまま静かに立ち上がり役人たちをにらむ。

「コイツ、神谷の悪竜だ……」

彼等の一人がそう言うと、役人たちは全員身体を強張らせた。

竜の内に燃え上がる怒りをその場にいる全員が感じとっていた。  
それは仲間の寅之助でさえ、息をのむほどだった。

だが、人一倍自尊心の強い村山鷹利は怯ま<sup>ひる</sup>なかった。

「ああ……、やっと出たか。自分から来るとは、捜す手間が省けた。  
神谷町の竜、貴様は投獄だ」

「投獄？何の理由で投獄だか知らねえが、まあいいさ。好きにすればいい……。」

だが仲間の仇が済んでねえんだ。俺をひっくくる前に、まずは覚悟しろよ、テメエら……！」

## 2・鷹の眼

2

戌の刻宵五ツ（午後八時）

鷹利はいつもよりずいぶん遅い帰宅となった。

この時分になると屋敷の門は村山家に仕える下男（従者、召使い）が閉じてしまっているの、横に据え付けられた小木戸口から入るしかなかった。

町方廻りの仕事をしていれば遅番や夜勤番があり、帰宅の際に玄関の門が閉じていることはよくある。

だから木戸を使うのは馴れているのだが、今日の鷹利は手が震えて、いつものように上手く開ける事が出来なかった。

くそっ、くそっ。

二度心の中で毒づいて、力一杯に戸を引いてみる。  
だが、ガタガタと鳴るばかりで、芯を嚙んだのか、ますます動かない。

そんなところで、この物音に気づいた下男の末吉が、怪しがって外に出て来た。

「だ……、誰だっぺ！？こんな夜分によ」

「私だバカ者！いちいち尋ねずに、さっさと開ける！」

鷹利の荒れた口調に末吉は驚き、馴れた手で素早く木戸を開いた。

「お帰りなさいまし、若さま。今日は常勤と聞いてましたが、またずいぶんと遅いお帰りで……」

木戸が開くと、さかやきが伸びて、だらし無い髪型になっている末吉の頭が鷹利の眼前に現れた。

「どけっ！」

鷹利は今年で六十歳になる痩せた身体の末吉を強引に払い退ける。だらしない頭髮が目の前に現れたことが、潔癖性な鷹利の勘にさわった。

自分が上手く開けられなかった木戸をこんな初老の男が、すんなりと開けたことも腹立たしかった。

とにかく今は何もかもが面白くない。

玄関で草履ぞうりを脱ぎ棄てると、足も洗わず自分の部屋へ入ってしまった。

彼のいら立ちはいつこうに収まらなかった。

夜の闇のせいかな、末吉には気付かれなかったが、鷹利の顔には大きな青アザが出来ている。

着物も袖や襟元が乱れ、破れていた。

こんな恰好になった理由は、先ほどまで神谷町の騒動で揉めに揉めていた為だ。

帰宅して部屋に入り、一息入れた今になって、身体中のあちこちが痛い。

その痛みを感じると、鷹利の収めどこのないイラ立ちは、自分への怒りに転換して、歯ぎしりを立てながら暗い部屋の床を叩いた。

長屋から住人を退去させる仕事が簡単な事だと思っていた訳ではない。

ただ今日の自分が行った、ぶさまな仕事振りが腹立たしかった。たかだか百姓以下の身分すら定かでない者を相手に反論を受け、実弟の寅之助には邪魔をされ、しまいにはただのゴロツキだと思っていた神谷の竜にも殴り倒された。

最後は長屋の住人たちと入り乱れて、取っ組み合いの喧嘩にまでなり、結局は何の進展すら得られる事は無く、まるで彼等に負けたように帰宅するありさまである。

自身の中に例える言葉があるとすれば、それはぶさまとしか形容するものが見つからず、鷹利は握りこぶしで何度も床や壁を叩いた。それでも怒りは収まらず、今度は畳の上に大の字に寝転がってみる。

暗闇に目が慣れたのか、ぼんやりと天井が見えた。

腰に差したままの刀が邪魔で、鷹利は無造作に大小の刀を着物の帯から抜いた。

だが、そのまま横に置こうとしたとき、柄を握るとひどくベタついた感覚があった。

なんだこれは……。

それが住人を胴切りにした時に着いた血糊だと思い出すには、やや時間を要した。

よく見れば着物も返り血を浴びていて、肌に貼り着いている。

そうか……、私はまた人を斬ったのか……。

鷹利は一瞬、つま先から頭のとっぺんまで電流の様な寒気を感じた。心の中に細くて影のような無数の手が、闇の中から伸びてくる。

くだらん！俺は藩のために働いたまでだ！逆らう愚物を斬って何が悪い！

心の中でそう叫ぶと、それ以上は人を斬ったという一事に対して何も考えなかった。

いや、考えなかったというより、みずから考えないように、しばらくぼんやりと見える天井だけを、ただ黙って見続けた。

村山鷹利はその過去に三度、人を斬っていた。

一度目も二度目もその後も、いずれも町方廻りの職務中にある。

一度目は逃げる罪人を取り囲んだ際に反撃を受け、無我夢中でやむなく斬った。

この時は六年前。

当時鷹利は藩校を出たばかりの十六歳。

父親と共に町方廻り同心として職務に就任し、半年を過ぎた頃だった。

この頃の鷹利は藩校兵学館を首席で出た秀才として、一年目から大いに期待され活躍していた。

だが順風満帆とした頃の人斬り。

まだ町方廻りとして若すぎた鷹利は、人斬りをした自分を、心の底まで病んでしまった。

それから一年ほど家に引きこもり、出仕する事の無い日々も送った。時代は天下泰平の江戸期である。

水石藩の町方廻りが、現在で表すところの警察職とは言え、実際に人を斬った者などほとんどいなかった。



任務の最中により罪にこそならなかったが、人を斬ったという個人の命と人生を終わらせた事實は、当時の鷹利の心の中に罪悪感という硬い鎖をかけた。

『不世出の鷹、地に墜ちる』

町方の奉行所内では、同輩たちがそんなふうに彼を哀れみ、また妬みから嘲笑する者もいた。

村山鷹利はもう駄目だ。二度と職務に戻れないだろう。

だが、誰もがそう思い始めていた頃、再び彼は町方廻りの職に戻った。

同輩たちは驚いたが、彼を戻したのは他ならぬ彼自身の烈しい自尊心だった。

斬ったことに悔いて心を病む日々よりも、周囲に侮りあなぢを受ける事のほうで鷹利には堪えがたい事だったのだろう。

鷹は目覚め、再び翼を広げた。

そして二度目に人を斬ったのは、そのわずか半年後である。

人質を取った押し込み強盗が商家屋敷に現れたが、鷹利はそんな人質などという脅しを無視して、強盗を一刀で斬殺した。

その時の同輩たちの言によれば、斬り伏せる前にも後にも、何の迷いも見えなかったという。

これは自分の決断を周囲に誇示するように見えたとき、同輩たちは彼を畏おそれた。

三度目は昨年の事で鷹利、二十一歳の夏であった。

賭博で捕まえた侠客のひとりを、詮議せんぎとは名ばかりの拷問にかけたのである。

寺博打を開き町民を食い物にしているという、その侠客一家を一網

打尽にするため、証拠取り詮議をしたが、相手が口を割らないとみると、見せしめとして十手で撲殺してしまった。

十五の歳に元服して、父とともに町方の職務に就いて七年。

鷹利は自らの行いすべてを、いつしか『藩の為、正義の為』と言って、はばからなくなった。

そして、今日の事もそうであると鷹利は眼を見開いた。

神谷町の住人退去は、藩の筆頭家老である酒井貞兼よりの命令だった。

藩の最高位に席を持つ酒井から、なぜか直属の上司である町方奉行や与力である父を通さずに、直接命令を受けていた。

直命の理由は不可解であったが、参勤交代により藩主は留守である。今のところ藩政治の仕置きの大権は、主席家老の酒井にあった。

その酒井の直命となれば、言わば上意（藩の命令、意向）と受け止めて問題ない。

上意に逆らうのは反逆行為である。

そう思うと神谷町の住人斬りに非は自分ではないと考えを固めた。

人を斬る事を迷ってはいけない。十手を振る正義の名分において、それを阻む者は斬るべきなのだ。

それが鷹利の今の考え方である。

少年の頃に苦しんだ人を殺めた呵責<sup>かしやく</sup>の心は、刀に血の錆<sup>さび</sup>を作ること  
に何処かへ失くしてしまった。

私は上意を持っている……。

退去の期日を、もはや待つには及ぶまい。

奴らは私に逆らった。

明日、神谷町など焼き払ってやる……。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2456ba/>

---

死番屋始末伝

2012年1月7日01時51分発行